

下土方青谷横穴群

発掘調査報告書

1993

静岡県小笠郡大東町教育委員会

しもひじかたあお や おうけつぐん
下土方青谷横穴群

発掘調査報告書

1993

静岡県小笠郡大東町教育委員会

序 文

地域開発が盛んに行われている今日、そこに埋蔵されている文化財は国民全体の貴重な文化遺産として、保護・保存が重要視されております。こういう中での、文化財行政は地域開発との調和のとれたものにしていかなくてはなりません。

静岡県小笠郡大東町下土方の下土方青谷横穴群発掘調査は、「県営農地開発事業」に伴い、中遠農林事務所のご協力をいただいて大東町教育委員会が実施しました。

調査の結果、2基の横穴が検出されました。その中の第2号横穴からは、直刀・土器が発見されました。この事業をとおして、この地域の古墳時代を理解するうえで貴重な資料を私達に提供してくれました。

今回の発掘調査は多くの方の御協力のおかげで実施できました。御協力いただいたみな様に心より感謝し、ここに報告書を発刊し、多くの方のご供覧を賜り、あわせて各位のご批判とご指導をお願いする次第です。

平成5年3月

静岡県小笠郡大東町教育委員会

教育長 青野行雄

例 言

1. 本書は、静岡県小笠郡大東町下土方1044-3番地先に所在する下土方青谷横穴群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営農地開発事業（茶園造成）に伴うもので、静岡県中遠農林事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと大東町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成2年6月25日から平成2年8月31日にわたり実施した。
4. 調査は大東町教育委員会の主体で鬼澤勝人（社会教育課）が調査を担当した。また、佐東南土地改良区事務所には全面的な協力を得た。
5. 調査の開始より報告書の作成に至るまで下記の方々に御指導・御協力をいただいた。
(順不同・敬称略)
五島康司・澁谷昌彦・坂巻隆一・太田直樹・渡辺康弘・大川敬夫・松本一男
塚本和弘・永井義博・柴田 稔・足立順司
6. 出土品等の整理及び本書の作成は、鬼澤が中心におこない、飯田三生（社会教育課）溝口淳子（社会教育課嘱託）が補助した。
7. 本書発行までの一切の事務は大東町教育委員会がおこなった。尚、調査資料はすべて大東町教育委員会が保管している。
8. 協力者 佐東南土地改良区事務所
理 事 長 石 川 安久理 ほか13名
9. 発掘作業員
増田秀一・中井己末・井垣忠志・相沢友次・前島 隆・石川時江・鈴木豊治

目 次

| | | |
|-----|---------------|------|
| 第1章 | 調査に至る経緯 | P 1 |
| 第1節 | 調査に至る経緯 | P 1 |
| 第2節 | 遺跡詳細分布調査について | P 2 |
| 第2章 | 遺跡の位置と周辺の環境 | P 4 |
| 第3章 | 調査の経過 | P 5 |
| 第4章 | 遺構について | P 9 |
| 第1節 | 第1号横穴について | P 9 |
| 第2節 | 第2号横穴について | P 12 |
| 第5章 | 遺物について | P 16 |
| 第1節 | 第1号横穴出土遺物について | P 16 |
| 第2節 | 第2号横穴出土遺物について | P 16 |
| 第6章 | まとめ | P 25 |

挿図目次

| | | |
|-----|--------------------|------|
| 第1図 | 下土方青谷横穴群の位置及び周辺遺跡図 | P 3 |
| 第2図 | 下土方青谷横穴群周辺環境図 | P 7 |
| 第3図 | 第1号横穴実測図 | P 10 |
| 第4図 | 第2号横穴実測図 | P 11 |
| 第5図 | 第2号横穴礫床・棺床実測図 | P 13 |
| 第6図 | 第2号横穴遺物出土状態図 | P 14 |
| 第7図 | 第1号横穴出土遺物実測図 | P 17 |
| 第8図 | 第2号横穴出土遺物実測図(1) | P 18 |
| 第9図 | 第2号横穴出土遺物実測図(2) | P 24 |

図版目次

- 図版 1
- 1 第1号横穴調査前現況
 - 2 第2号横穴確認状況
 - 3 下土方青谷横穴群調査前全景（西から望む）
 - 4 下土方青谷横穴群封鎖石検出状況
- 図版 2
- 1 第1号横穴封鎖石検出状況
 - 2 第1号横穴封鎖石検出状況（正面）
 - 3 第1号横穴開口部周辺完掘状況
- 図版 3
- 1 第1号横穴事前調査時確認状態
 - 2 第1号横穴玄室内遺物出土状態
 - 3 第1号横穴玄室内完掘状態
 - 4 第1号横穴完掘状態
 - 5 第1号横穴墓前域完掘状態
- 図版 4
- 1 第1号横穴発掘作業風景
 - 2 第1号横穴周辺発掘作業風景
 - 3 第1・2号横穴発掘作業風景
 - 4 第1・2号横穴発掘作業風景
- 図版 5
- 1 下土方青谷横穴群完掘状態全景（西から望む）
 - 2 第2号横穴封鎖石検出状況（正面）
- 図版 6
- 1 第2号横穴直刀出土状態
 - 2 第2号横穴須恵器出土状態
 - 3 第2号横穴礫床検出状態
 - 4 第2号横穴棺床検出状態
- 図版 7
- 1 第2号横穴玄室内側壁付近ノミ痕状態
 - 2 第2号横穴玄室内完掘状態
 - 3 第2号横穴開口部周辺完掘状態

- 図版 8 1～5 第2号横穴出土須恵器有蓋高坏蓋
 6～10 第2号横穴出土須恵器有蓋高坏
- 図版 9 1 第2号横穴出土須恵器・坏蓋
 2 第2号横穴出土須恵器・坏身
 3 第2号横穴出土須恵器・蓋坏の合わせた状態
 4 第2号横穴出土須恵器・長頸壺
 5 第2号横穴出土須恵器・提瓶
 6 第2号横穴出土須恵器・甌
 7 第2号横穴出土須恵器・長脚付広口埴
- 図版10 1 第2号横穴出土鉄製品・直刀
 2 第2号横穴出土・鏝

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

下土方青谷横穴群は、静岡県小笠郡大東町下土方1044-3番地に所在する。周囲は、小笠山丘陵から延びる台地が佐東川に開析されており、斜面部は茶畑に利用され、平野部は水田として耕作されている。茶畑は急斜面がほとんどであり、作業を効率的に進めるためにも茶園造成が必要とされた。

このような地域に佐東南土地改良事業として、県営農地開発事業（茶園造成）が計画され、佐東地区を5つの工区に分け、順次造成工事を実施することになった。これを受けて大東町教育委員会は静岡県教育委員会文化課の指導のもと、静岡県中遠農林事務所及び佐東南土地改良区事務所と再三にわたる協議の末、埋蔵文化財の発掘調査をおこなうこととなった。この土地改良事業の5工区のうち、山田工区については昭和62年度に岩滑清水ケ谷横穴群・松ケ谷横穴として発掘調査が実施され、報告書が刊行されている。また、当該遺跡の存在する近江ケ谷工区については、工事面積が広いため2ヶ年度に分けて造成工事を実施する計画となった。近江ケ谷工区のうち、平成元年度の工事計画は工区内の中方地区であり、ここに玉体横穴群9基の存在が前年度の遺跡詳細分布調査にて確認され、工事着手前に発掘調査を実施した。さらに、同年度内に次年度工事地区である下土方地区の遺跡詳細分布調査をおこなった。これにより、新たに2基の横穴が発見され県文化課に届け出るとともに、急きよ埋蔵文化財の取扱いについて中遠農林事務所及び佐東南土地改良区事務所と協議した。近江ケ谷工区については、すでに半分の地域で工事の実施がおこなわれており、この段階で計画を変更することができないので、工事着手前に本調査を実施することとなった。

第2節 遺跡詳細分布調査について

前節で述べたとおり、近江ヶ谷工区内、平成2年度に工事実施予定の下土方地区については、平成元年度に遺跡詳細分布調査をおこなった。この下土方地区には、今までに埋蔵文化財は確認されていなかったが、付近には遺跡が存在しており、また、広範囲において台地を掘削し谷間を埋めてしまうため、遺跡の有無を確認することを目的として事前に調査を実施した。

この調査は、平成元年度の国及び県の補助金をいただき、平成2年2月15日から3月22日までの期間に大東町教育委員会が主体となり、工区内下土方地区に12ヶ所のトレンチを設定しておこなった。

調査対象地域は、比較的海拔の高い丘陵であるがやせ尾根状に連なっており、尾根道上に点々とした、墳丘の様相を思わせる地点が数多く見られた。また、その他の遺跡の存在も考えられたため、存在の予想される地点にはすべてトレンチを設定した。さらに、東側及び南側に傾斜する斜面は横穴の存在も考えられるため、雑木林やブッシュの間に分け入って踏査をし、また、ボーリング棒による探査もしくは表土剝離を実施した。

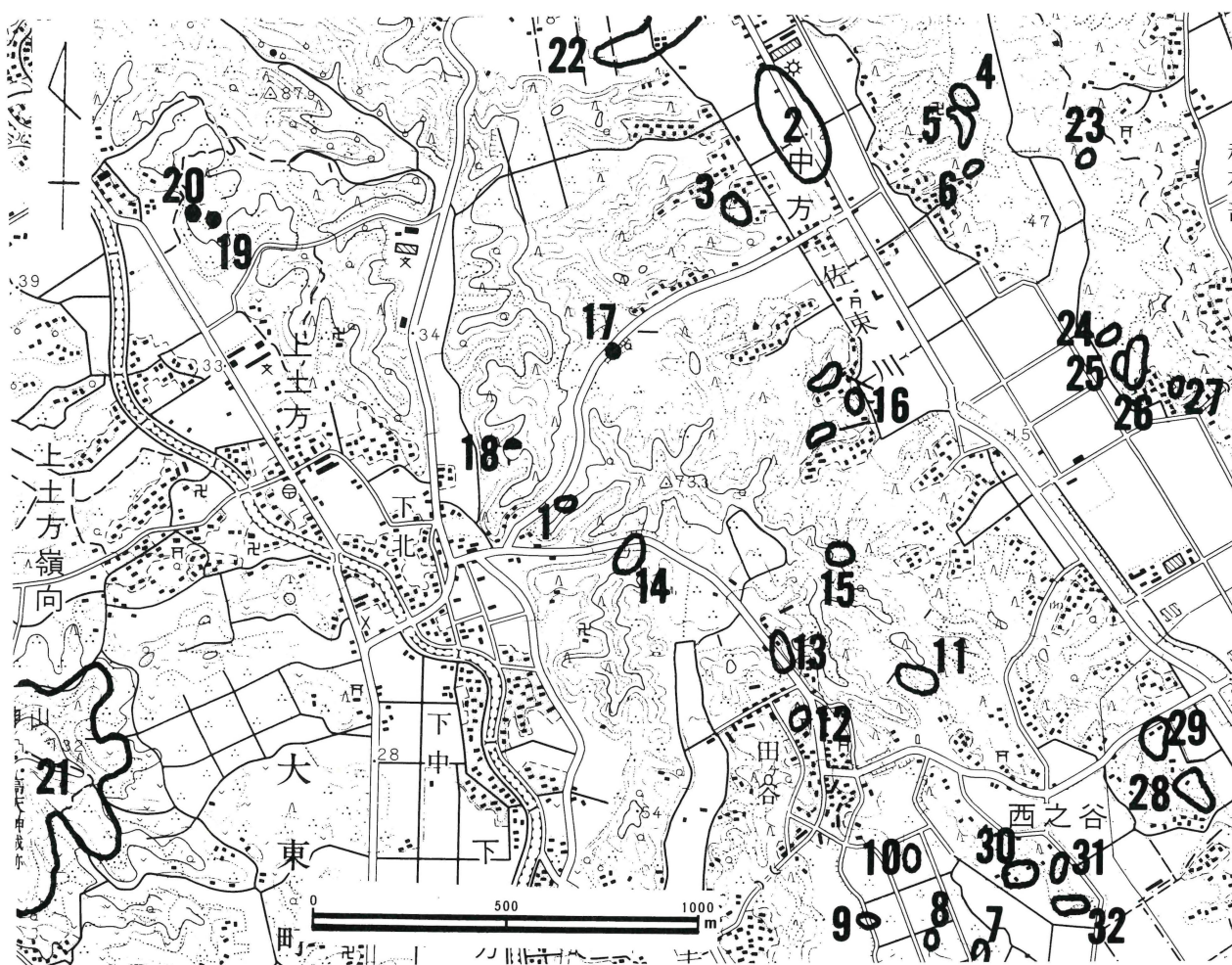
その結果、古墳やその他の遺跡などは全く確認できなかった。古墳等の盛土や削出しの様子もなく、また、遺物も出土しなかった。

しかし、確認調査も終わりに近づいた頃、尾根道上の台地頂上に小高い円形の山がありその頂上にトレンチを入れて調査をしているときに偶然、その西側斜面が丸い円筒状に崩落しているのが見つかった。そこは、崩落した土砂で完全に埋まっていたが、内部の清查が進む中で人骨片数点と土師器片数点が検出され、横穴の形態が現れてきた。また、そこより北側に約5mの地点に木の根の腐敗したような径20cm程の穴が見つかり、同時に周辺の表土を剥ぐ作業をおこなった。

その結果、当初確認された穴からは、封鎖石と思われる人頭大の河原石が積まれており遺物の出土量も多くなったため、横穴の存在が明らかになった。また、北側の穴の周辺表土も排土すると封鎖石が検出され、内部が空洞になっているのが見わたせるようになり、かなり多量の土砂が流入し水が溜まっているが、須恵器坏蓋が確認できたためこれを第2号横穴と命名した。しかし、これ以外に横穴は検出されなかった。

また、当初この地域には周知の遺跡がなかったため、補助金についての諸届出や発掘調査の届出などは、佐東南地区内遺跡として届け出ていた。本調査にあたり横穴が確認された地点が下土方字青谷という地番であり、青谷という字名は町内他地区にもあることから「下土方青谷横穴群」と命名した。

さらに、この遺跡詳細分布調査では、中遠農林事務所の御理解と佐東南土地改良区事務所の方々の全面的な御協力を得て、土地所有者の方々とのパイプ役となっただいたため実施することができた。ここに、感謝の意を表したい。



| | | | |
|----|------------|----|------------|
| 1 | 下土方青谷横穴群 | 17 | 丸山古墳 |
| 2 | 中方遺跡 | 18 | 笹ヶ谷横穴群 |
| 3 | 山崎横穴群 | 19 | じょうげん2号墳 |
| 4 | 山田ヶ谷A横穴群 | 20 | じょうげん1号墳 |
| 5 | 中方B横穴群 | 21 | 高天神城 |
| 6 | 中方A横穴群 | 22 | 中方北遺跡 |
| 7 | 毛森山一の谷C横穴群 | 23 | 松ヶ谷横穴 |
| 8 | 毛森山一の谷B横穴群 | 24 | 清水ヶ谷横穴群 |
| 9 | 毛森山勝田ノ谷横穴群 | 25 | 城山遺跡 |
| 10 | 毛森山一の谷A横穴群 | 26 | 八ッ谷横穴群 |
| 11 | 猫田横穴群 | 27 | 穴口横穴群 |
| 12 | 田ヶ谷B横穴群 | 28 | 山脇横穴群 |
| 13 | 田ヶ谷A横穴群 | 29 | 興禅庵横穴群 |
| 14 | 田ヶ谷C横穴群 | 30 | 毛森山一の谷F横穴群 |
| 15 | 火ヶ蜂横穴群 | 31 | 毛森山一の谷H横穴群 |
| 16 | 玉体横穴群 | 32 | 毛森山一の谷G横穴群 |

静岡県大東町位置図



第1図 下土方青谷横穴群の位置及び周辺遺跡図

第2章 遺跡の位置と周辺の環境

下土方地区は、地図上において大東町のほぼ中心に位置しており、中央を下小笠川が流れている。下土方青谷横穴群は下土方地区の中でも北側の、下小笠川東岸にあたる台地上に所在し、横穴群の密集している佐東・中地区にそれぞれ隣接している。

この台地は小笠山丘陵から南東へ延びており、台地の東側は佐東川に、西側は下小笠川により開析され、複雑に入り組んでいる。

このような台地の南側斜面には横穴群が存在するケースが多いが、当該横穴群が所在する地点は、南西に張り出した小さな台地の1つで、台地縁辺部が複雑に蛇行し多くの谷間が形成されている。その小支谷を構成している北へ張り出した台地の1つで、その台地縁辺部の西向きの斜面に存在する。こうした西向きに開口する横穴群は周辺においても比較的例が少なく、また、横穴群が集中している地域からも離れており、ほぼ最西端に位置している。

従ってこの周辺には横穴群の存在は少なく、西対岸の台地に笹ヶ谷横穴（No.18）、南側へ約150mに田ヶ谷C横穴群（No.14）が、比較的近い地点に確認されている他は、東へ約600mに玉体横穴群（No.16）があり9基の横穴群が平成元年度に調査され、鏡・刀子などが出土しており、6世紀後半～7世紀代に築造されている。さらに東へは、佐東川左岸の清水ヶ谷横穴群（No.24）・松ヶ谷横穴（No.23）・八ツ谷横穴群（No.26）を有する台地が広がり、多数の横穴群が密集して確認されている。このうち清水ヶ谷横穴群・松ヶ谷横穴は昭和62年に発掘調査がおこなわれ、6世紀後半～7世紀代の遺物が出土している。また、南東へ約500mの地点には毛森の横穴群（No.7・8・9・10・30・31・32）が位置して、多くの横穴群が大規模に展開していた。

このように、横穴群が佐東川流域に集中しており、下小笠川流域右岸側にはほとんど横穴群が存在していない。周辺遺跡図には示せなかったが、下小笠川流域については、さらに南方下流右岸に本勝寺裏横穴群が確認されているのみで、右岸側台地上には多くの古墳（高塚墳）が点在している。このように、下小笠川右岸までは高塚墳が展開し、同左岸から東方へ大きく菊川流域の横穴群が発達しており、当該横穴群が西限に位置する分布状況である。しかし、佐東

川流域においても丸山古墳（No.17）をはじめとして、いくつかの高塚墳の存在が認められており、横穴群が集中する地域であっても高塚墳が混在しているのが明らかであり、明確な分布域の線を引くことはできない。

また、横穴群以外の遺跡として、佐東川流域の平野部に中方遺跡（No.2）・中方北遺跡（No.22）・城山遺跡（No.25）が確認されており、いずれも古墳時代後期を中心とした遺物の散布が見られ、横穴群の被葬者層の痕跡を示すものであろう。このうち、中方遺跡は昭和63年・平成元年に発掘調査が実施されているが、住居址等は検出されていない。

以上、本横穴群の周辺環境を概観してみたが、今後、予想される調査において、さらに周辺地域の古墳時代の様相が次第に明らかになっていくことと思われる。

第3章 調査の経過

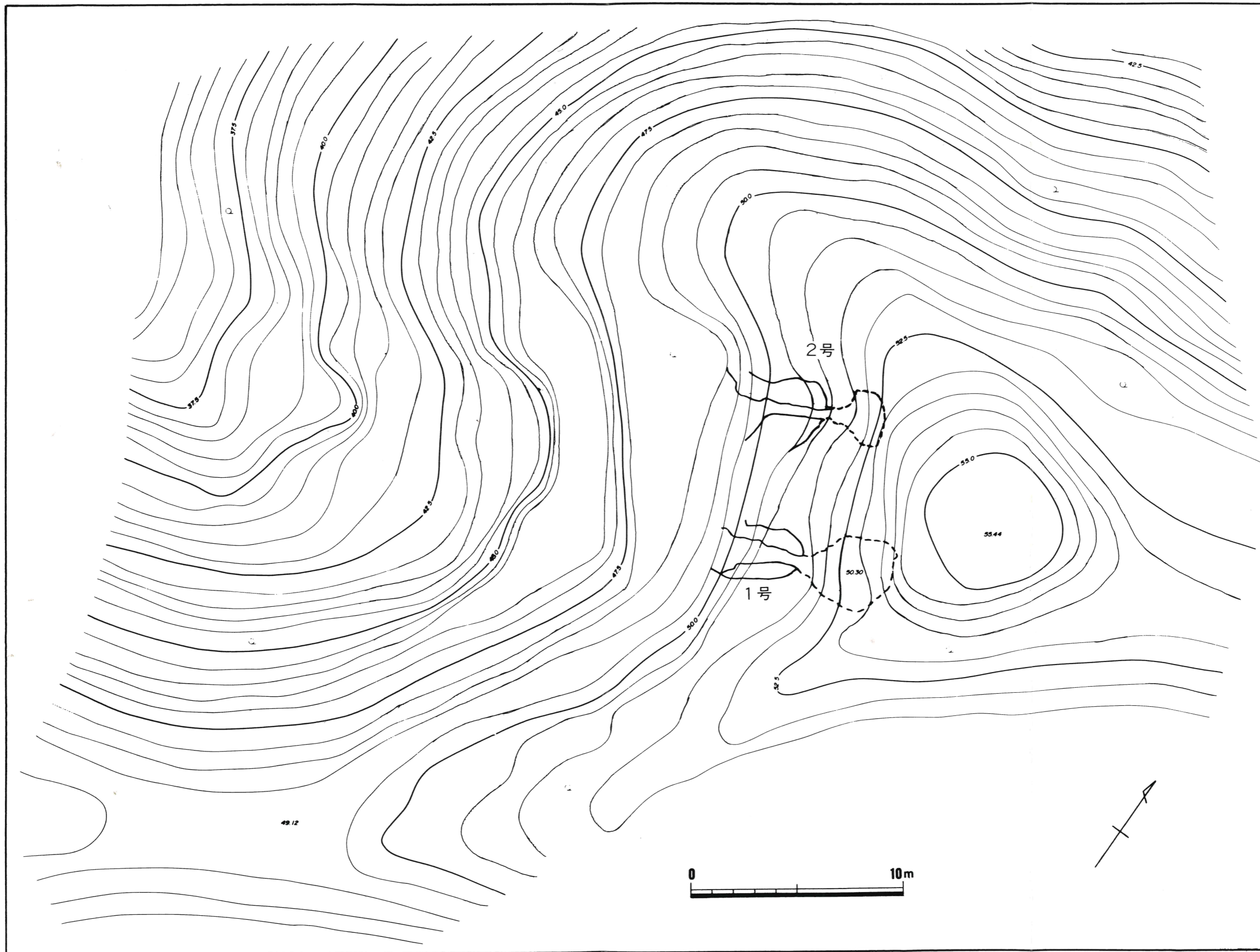
先述したとおり、下土方青谷横穴群発掘調査事業は県営農地開発事業に伴う調査で、平成2年6月25日より8月31日まで実施した。調査では、横穴開口方向斜面下には町道が通っており排土を流すことができないため、調査に先立ってまず、重機で南側のやせ尾根の部分に切り通しを作り、裏山へ土を処理することとなった。また、横穴周辺には多量の表土が堆積していたため、重機にて排土した。この重機で、平坦地を作り発掘用具等を置くテントを設営した。さらに、地形測量は業者に委託し、基準点等を設置した。

遺構実測図は1/10を原則として作成し、写真は6×7判と35mm判カメラで、白黒・カラースライドフィルムを用いた。

調査は、発見当初より玄室内に水が溜まっていた第2号横穴では、連日の雨天、さらには、台風などで度々雨水が溜まり、再三にわたる排水処理のため困難を極めた。また、第1号横穴では表土の排除および風雨により、天井崩落部分がもろくなり頻繁に落盤が起こった。

尚、調査経過の概略は以下のとおりである。

| | |
|-------|---------------------|
| 6月25日 | 調査開始・用具搬入 |
| 6月27日 | 発掘調査関係者出席のもと御祓い |
| 28日 | 第1・2号横穴周辺表土剝離 |
| 7月2日 | 第1・2号横穴封鎖石清查 |
| 11日 | 第1号横穴封鎖石実測 |
| 8月1日 | 第2号横穴封鎖石実測 |
| 2日 | 第1号横穴墓前域発掘 |
| 9日 | 第1号横穴玄室内発掘 |
| 13日 | 第2号横穴玄室内発掘・直刀出土 |
| 16日 | 第2号横穴・遺物（須恵器）出土 |
| 21日 | 第1号横穴遺物出土状況分布図実測 |
| | 第2号横穴・棺床検出 |
| 23日 | 第2号横穴実測 |
| 24日 | 第2号横穴墓前域発掘 |
| 28日 | 第1号横穴実測 |
| 29日 | ノミ痕観察 |
| 31日 | 全測図実測・完掘遠景写真撮影・用具搬出 |
| | 調査終了 |



第2图 下土方青谷横穴群周边环境图

第4章 遺構について

第1節 第1号横穴について

●調査着手時の状態

やせ尾根の台地上に径約15mの小高くなった円形の山があり、その西側斜面がオーバーハン
グ状に崩壊していた。その崩壊した壁面がやや円形の様相を示しており、内部は若干低くなっ
ているものの、前面部分とほぼ同じ高さに土砂が堆積していた。

玄室の中心より、やや奥壁側から羨道部にかけて天井部が完全に崩落しており、横穴周囲は
雑木に覆われていた。玄室内には、落盤による土砂が多量に流入していた。

●玄室・羨道部

本横穴の主軸はN-61°-Eを指す。玄室の平面形はほぼ羽子板型を呈し、玄室長は3.8m、
最大幅3.5mの規模である。横断面形は蒲鉾形を呈し、壁面と天井部の境界は不明瞭である。
また、天井部はほぼ落盤している。床面には、玄室内右半分に組合せ式箱式木棺を安定させた
と思われる溝が検出された。この溝は四周しており、長軸を玄室長に合わせている。また奥壁
側が深く、台形を呈する平面形の短辺は奥壁側にある。開口レベルは、海拔49.66mで奥壁付
近は49.94mである。

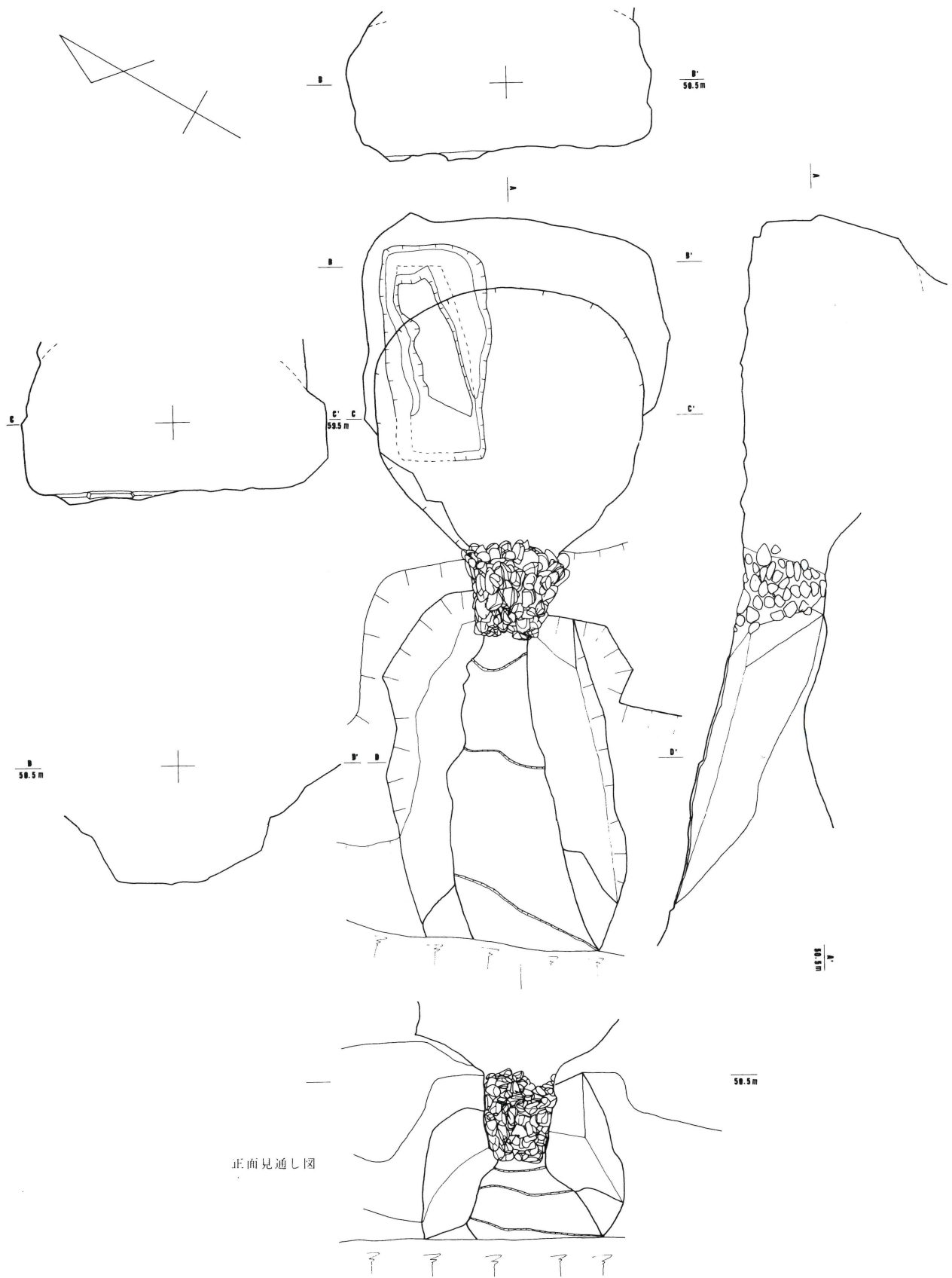
羨道部は、玄室側壁面から急激に幅が狭くなっているところで、玄室壁面と羨道壁面との境
は明瞭に区別できる。また、開口部側も同じく急角度で墓前域に広がっているため、境界は明
瞭である。規模は、長さ0.9m、幅0.7mで天井部は崩落しており不明である。

●工具痕の観察

本横穴は、天井部がほとんど残存しておらず、また、壁面も大部分が崩落しており壁面観察
のできるところが、わずかに限定されてしまっている。従って、規則性などは不明である。奥
壁付近に仕上げ用の幅12cm程の、やや曲刃をした鋤先が若干観察できた。

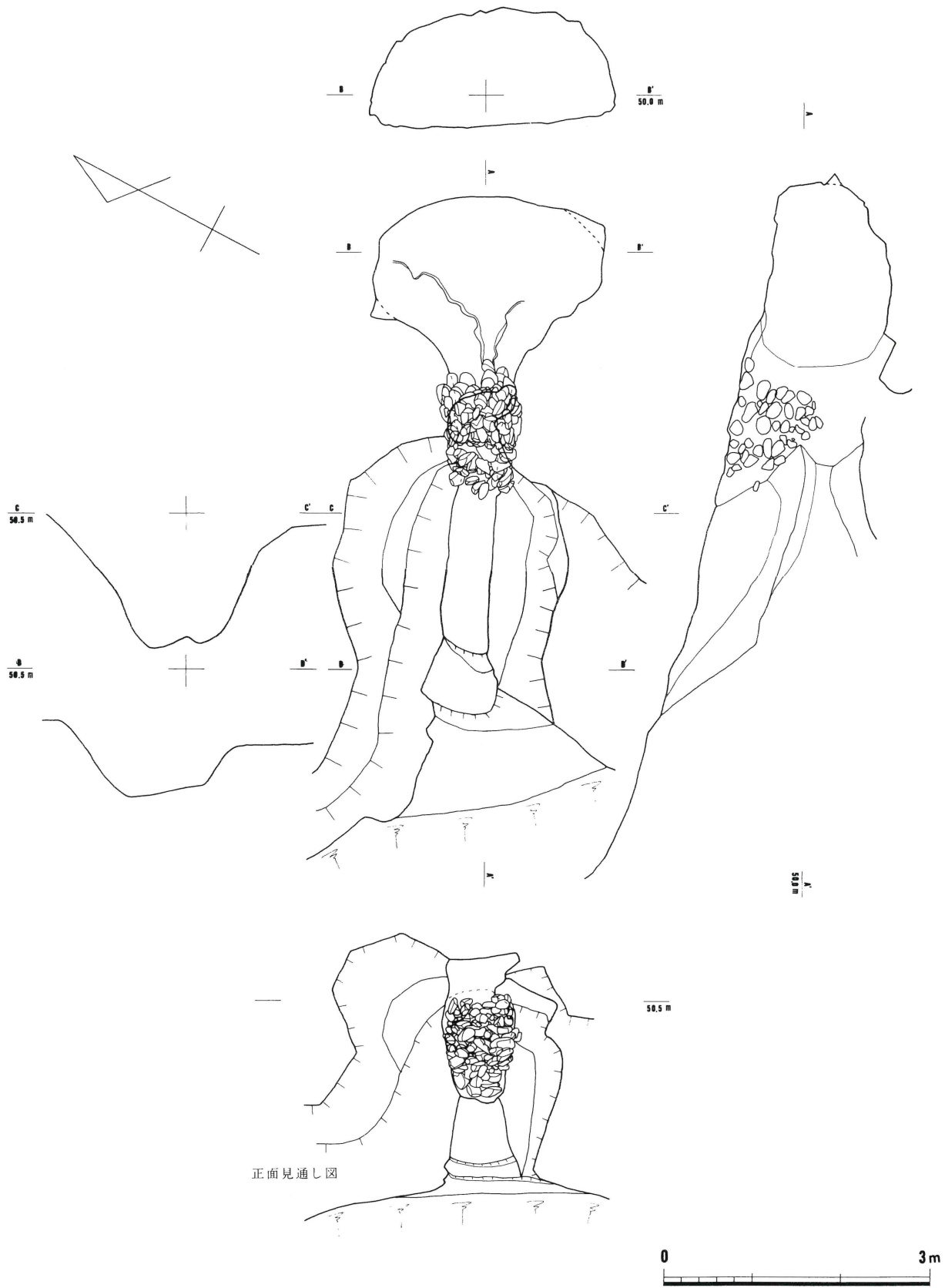
●墓前域

墓前域は前端部を欠くが、残存長で3.9mを測る。羨門部から急激に広がり、やや八の字形
にゆるやかに広がり前端部へ延びる。左側壁は凹凸がなく一直線であるが、右側壁はやや湾曲
した形状となる。



正面見通し図

第3図 第1号横穴実測図



第4図 第2号横穴実測図

墓道は、ほぼ直線的に傾斜して下っており、開口部と前端部の比高差は0.94mであり、開口部で幅0.5m、前端部で幅1.24mを測り、途中3ヶ所の段差を持つ。

●封鎖部

河原石の小口積みによる封鎖施設が残存していた。この河原石は断面長円形の礫を使用しており、床直に近い程この礫の使用が多くなり、頂部付近の石の形は様々である。

これらを玄門側に扇形に開くようにして並べられている。封鎖石は床面で1.06m、高さは0.98mの範囲に施されている。

●出土遺物

本横穴からは、須恵器片13点・土師器片25点・山茶碗1点・人骨片54点が出土した。須恵器片、土師器片については、全て細片であり、器形が判断できるものでは、須恵器では、横瓶1点・平瓶1点・坏2点である。土師器についても同様に甕2点・坏2点・高坏1点である。人骨についても、残存状態が悪く形状をとどめるものがない。わずかに頭骨片が見られるが、1体分と思われる。鉄製品は6点出土しているが、棒状のもので形状は不明である。

第2節 第2号横穴について

●調査着手時の状態

本横穴は、第1号横穴と同じ北へ張り出す台地の西側斜面にあり、若干段々になった地形で、第1号横穴の北隣約5mの地点に存在し、周囲には雑木が茂っていた。また、完全に表土に覆われており、羨門の上部に径20cm程の穴があいていたのみで、他は封鎖石により閉じられていた。多少封鎖石が崩れている部分もあったが、羨門上部の穴は地山が崩れたものと思われ、盗掘を受けていないと考えた。玄室内部には土砂が流入し水が溜まっていたが、その中に須恵器坏蓋が確認できた。

●玄室・羨道部

本横穴の主軸はN-62°-Eを指す。玄室の平面形は撥形を呈しており、玄室長2.22m、最大幅2.54mの規模である。横断面形は蒲鉾形を呈し、壁面と天井部の境界は不明瞭である。天井部の最大高は1.4mを測り、ドーム形を呈する。開口レベルは海拔49.26mであり、奥壁付近は49.72mである。

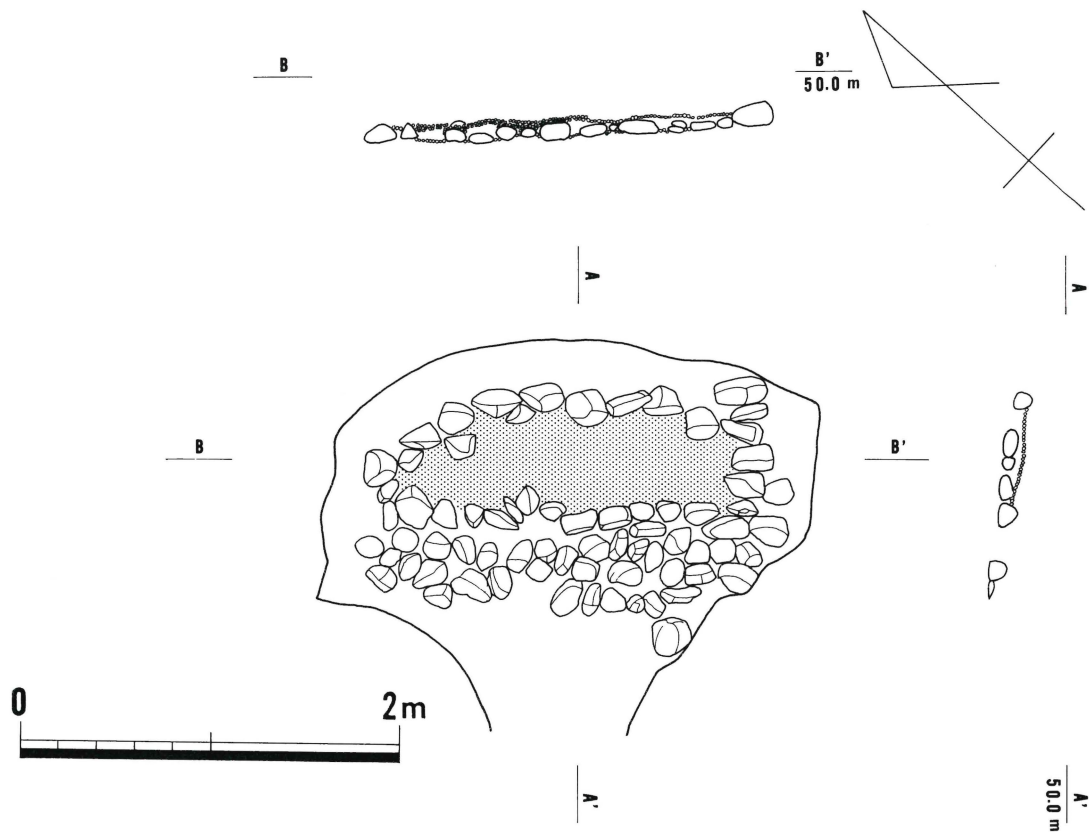
床面には、左右側壁から開口部に向かって逆八の字形に、地層の境を利用して削った排水溝が設けられている。

さらに、第5図に示したとおり、人頭大の河原石による礫床が施されていた。また、棺が置かれていたと思われる位置には、小礫を敷き詰めた棺床が検出されている。この礫床の隙間には粘土質の土が詰まっており、調査当初に玄室内に水が溜まっていたことを考えると、貼り床が施されていた可能性もある。これらの礫床は、奥壁及び側壁の立ち上がり部分では検出されないことから、周溝を施していたと思われる。

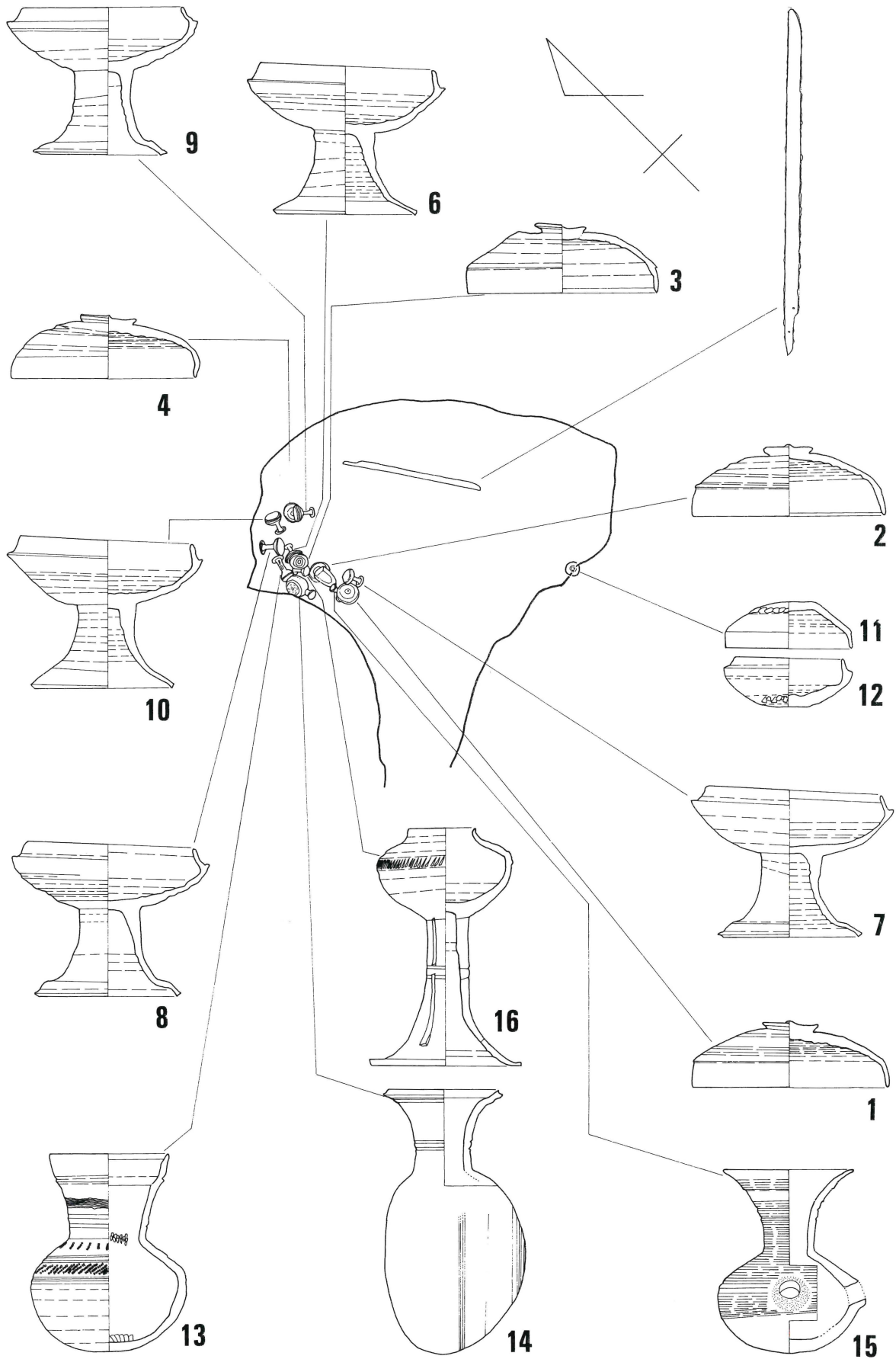
羨道部は不明瞭であるが、排水溝が消滅するところから側壁が直線的になり、墓道から左右に広がる位置までとすると長さ80cm、幅50cmを測る。天井部は崩落しており、床面は10°の傾斜で下がり、奥壁から1段の段差がある。

●工具痕の観察

床面から約30cm～70cmの範囲の壁面に、径1.5cm程のツルハシ状工具の痕跡が見られる。同



第5図 第2号横穴礫床・棺床実測図



第 6 图 第 2 号横穴遗物出土状态图

じ範囲内で若干数であるが、長径3cm、短径1cmの楕円形の工具痕も観察できるが、ツルハシ状工具を抜く時点で動かした痕跡とも考えられ不明確である。これらは荒掘りに使用されたようであるが、方向性に規則的なところはなく乱雑に掘られている。さらに、仕上げ用として、幅15cmの曲刃痕もみられるが、同じく方向性は不明瞭である。

●墓前域

墓前域は前端部を欠くが、残存長4.06mを測る。開口部から左右に湾曲して広がり、最大幅は2.64mあり、前端部へ下降しながら狭くなっていく。左側壁は急角度で直立しているが、右側壁はゆるやかに傾斜しており、第1号横穴と同じ様相を呈する。

墓道は、開口部で幅50cmを測り、やや真西にカーブしたあと、八の字状に急に広がりやや南向きとなる。このため、第1号横穴と合流すると考えられる。前端部での最大幅は、2.54mを測り、途中2ヶ所の段差を持つ。墓道の傾斜は比較的急角度で、羨門部と前端部との比高差は1mを測る。

●封鎖部

多少、崩れた石もあったが、河原石による小口積みの封鎖施設が完存していた。

これは、断面長円形の礫を主に使用して、石積みを施している。

石積みの順序としては、円礫を床面に縦方向へ並べて、その上の礫との接点に次の段を組む方法で互い違いにしている。また、明確に確認はできなかったが、礫と礫との隙間に粘土質の土を詰めたようであり、玄室内に水が溜まったのはこの為と思われる。

●出土遺物

本横穴からは、須恵器15点・直刀1振・鏝1点が出土した。その状態図を第6図に示した。

須恵器は、先に示した、礫敷床面に折り重なるようにして出土した。有蓋高坏蓋5点・有蓋高坏5点・長脚付広口埴1点・長頸壺1点・甗1点・埴瓶1点・蓋坏1組で、全て完形品である。蓋坏以外は、玄室内右側の開口部に近い地点にまとまって出土している。蓋坏は、蓋が合わさった状態で出土したが、内部からは何も検出されなかった。

直刀は、先に示した棺座のほぼ中央に切先をやや開口部側に向いた形で出土しており、鏝についてはその直刀の中央から出土した。また、奥壁に沿った形で、棺座と奥壁との隙間の、周溝と思われるところに人骨が数点出土した。

玉類は、水洗選別作業を行ったが、出土しなかった。

第5章 遺物について

第1節 第1号横穴出土遺物について

(第7図)

本横穴からの出土遺物は、細片が多く実測ができるものがほとんど無かった。しかし、器形が判断できるもので須恵器の横瓶・平瓶や、土師器の坏・高坏などから、6世紀後半の遺物と見られる。また、山茶碗・かわらけなども出土している。

1. 坏蓋（須恵器）

口縁部の破片の断面である。口縁部はやや外反している。残存している体部には左回転ヘラケズリされ、口縁部は、ナデ調整されている。口縁部と体部との境に不明瞭な稜を持つ。胎土は砂粒子を含み密で、焼成はやや不良で、色調は白灰色を呈する。

2. 山茶碗

口径（推定）16.0cm×器高（推定）5.9cm

口縁部で残存部が1/6あり、全体では、30%が残存している。外反する口縁部はナデ調整して薄く仕上げる。体部からはやや屈曲して底部は厚く仕上げ、高台をつける。高台は糸切り後つけられ、底部にて手持ちヘラケズリによる接合をしている。

胎土は砂粒子を含み緻密で、焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

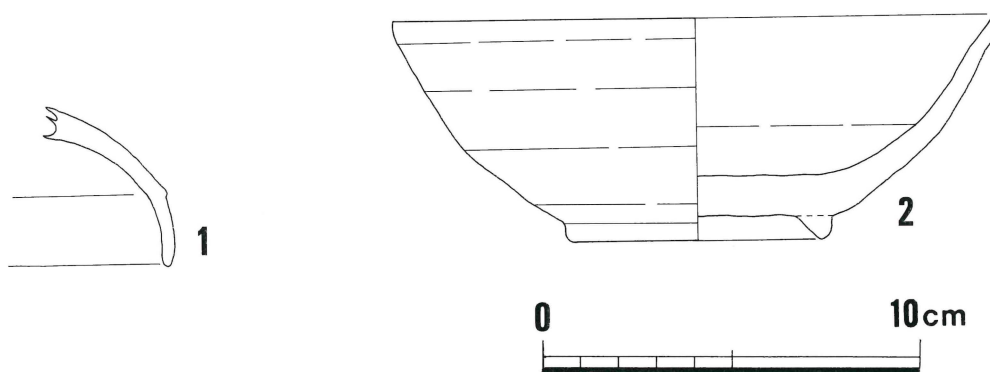
第2節 第2号横穴出土遺物について

●須恵器について（第8図）

1. 有蓋高坏蓋

口径13.9cm×器高4.9cm

口縁部と体部との境に稜をつくるが完全なものではなく、1/3 はなだらかに消滅している。口縁端部はやや内湾している。頂部を平坦につくり体部はやや丸みを持つ。



第7図 第1号横穴出土遺物実測図

頂部には、中心をとがらせた偏平のボタン状のつまみを付す。頂部外面は右回転ヘラケズリされ、体部ではナデ調整されている。口縁部は、丁寧なナデ調整が施されている。内面は、全体に丁寧なナデ調整がされている。胎土は最大径1mmまでの白色粒子を多量に、さらに砂粒子を含み緻密である。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。尚、焼成時の若干の歪みがある。

2. 有蓋高坏蓋

口径13.7cm×器高5.3cm

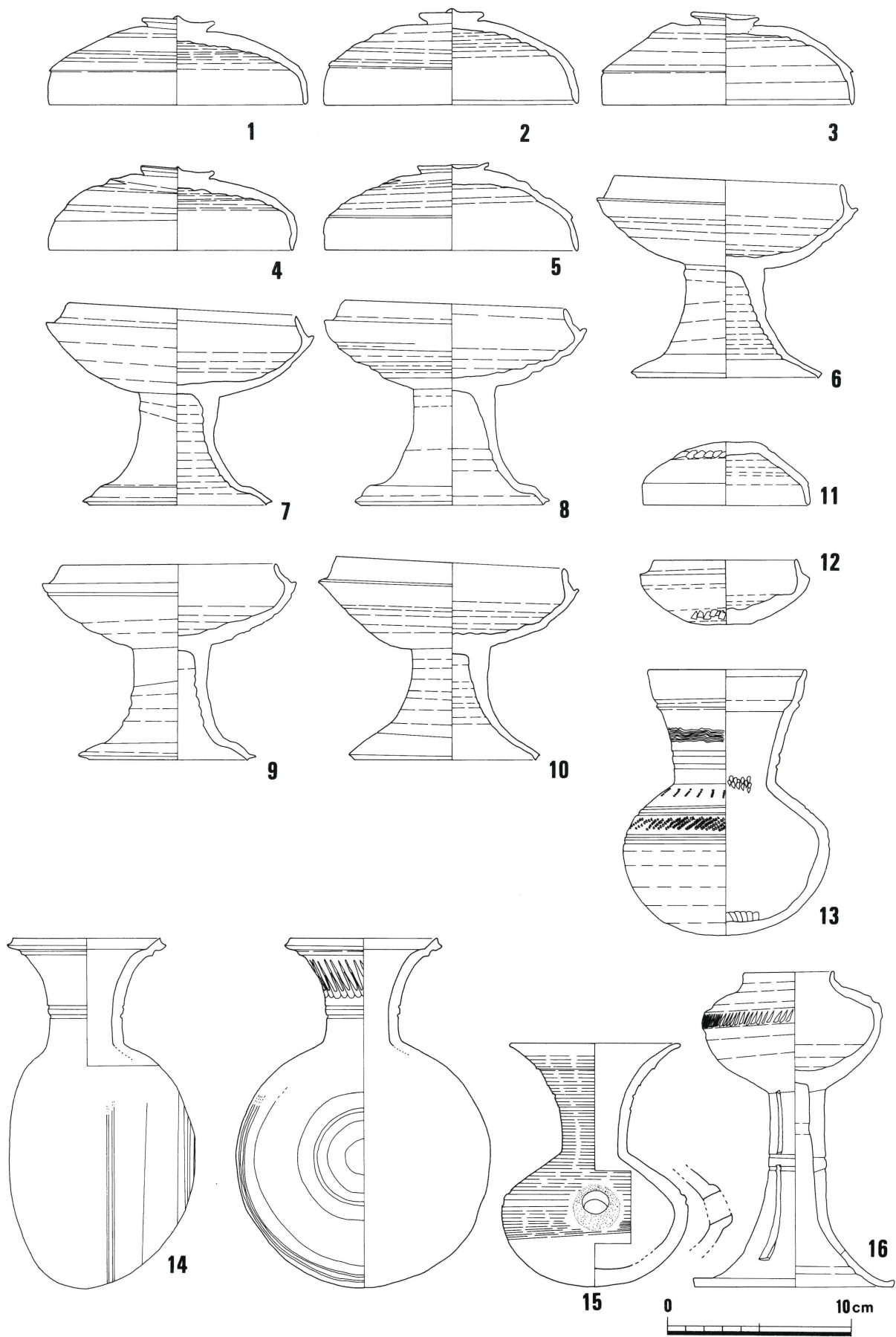
体部から口縁部を丸くつくり、口縁端部を外反させ口縁部と体部の境に稜を持ち、頂部はやや平坦につくる。頂部に中心をとがらせた偏平のボタン状つまみを付す。

頂部は右回転のヘラケズリであり、体部はその後ナデ調整している。口縁部は、ナデられ口縁端部をつまみ出して薄く仕上げる。内面は全てナデ調整し、内外面とも強いノタ目が残る。内面口縁端部に稜を持ち、口唇部は極薄く仕上げる。胎土は、砂粒子を含み密で、焼成は良好、色調は青灰色を呈する。

3. 有蓋高坏蓋

口径13.7cm×器高5.0cm

頂部を平坦につくり、体部から口縁部にかけて台形の様相を呈する。体部と口縁部の境に稜を持つ。口縁部はやや直立し、口唇端部に段をつける。頂部には、接合痕がある偏平のボタン状のつまみを付し、右回転ヘラケズリされ体部ではさらにナデ調整されており、



第8图 第2号横穴出土遗物实测图(1)

弱いノタ目が消されている。内面はノタ目が強く残り、ナデ調整で消している。口縁端部をつまみ出し薄く仕上げる。胎土は、外面に最大径1mmまでの白色粒子が多量に含まれる。焼成は良好で、色調は外面で暗灰色、内面で灰色を呈する。焼成時の有機物による焼きぶくれが多く見られる。

4. 有蓋高坏蓋

口径13.2cm×器高4.6cm

体部から口縁部へかけて丸くつくり、境には不明瞭な稜を持つ。頂部には、偏平なボタン状のつまみを付す。外面は右回転ヘラケズリされ、体部からはさらにナデ調整を施しているが、強いノタ目が残されている。口縁内面は内湾する様相を示すが、体部からは強く屈曲させており、口縁端部は弱い稜を持ち極端に薄く仕上げている。内面はナデ調整されているが、ノタ目が残されている。胎土は砂粒子を多く含む密で、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。また、歪みが大きい。

5. 有蓋高坏蓋

口径13.8cm×器高4.8cm

この有蓋高坏蓋は本横穴が発見された当初、水中に埋没していた遺物である。

体部をやや丸くつくり、口縁部との境に不明瞭な稜を持ち屈曲させている。頂部はやや平坦につくり、凹みのある偏平なボタン状のつまみを付す。頂部から体部にかけて右回転ヘラケズリがなされているが、体部途中からナデ調整されている。また、強いノタ目が残されている。口縁部は直立気味であるが、内部断面は外反しており、台形を呈する。内面調整も右回転のナデ調整がされているが、強いノタ目が残されている。また、体部と口縁部の境は右回転ヘラケズリが残されている。胎土は、極細粒の白色粒子が含まれ、砂粒子で密である。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

6. 有蓋高坏

口径12.4cm×器高11.1cm×最大径14.6cm×脚部径9.7cm

口縁端部は強くナデられ内傾する。蓋受け部は、工具で押さえられた痕跡が残る。

坏部内面は右回転ナデ調整されるが、底面にはノタ目が残る。坏部は丸くつくり、外面は右回転ナデ調整されているが弱いノタ目が残る。坏部と脚部の接合部分は右回転ヘラケ

ズリされているが、他の所に比べ雑に仕上げており、ヘラ状工具でナデつけた痕跡を残す。脚部はラッパ状に開くが、端部近くで屈曲して段を持ち、さらに広がる。脚端部は肥厚させ、脚口径部と端部とへ広がる。脚部外面も右回転ナデ調整が丁寧に施されるが、内面はナデ調整され強いノタ目が残されている。胎土は1mm以下の白色粒子を含む砂粒子で緻密であり、焼成は良好で、色調はやや暗い灰色を呈する。

7. 有蓋高坏

口径12.0cm×器高11.3cm×最大径14.4cm×脚部径10.0cm

坏部は丸くつくられ、口縁部は強くナデ調整され内傾しているが、蓋受け部からの立ち上がりの部分は若干屈曲している。蓋受け端部は玉縁化され、工具で押さえた痕跡を残す。坏部外面は右回転ヘラケズリされた後、ナデ調整で消しているが、強いノタ目が残っている。内面はナデ調整を施しており底部には、ノタ目が残されている。

また、脚部との接合部の調整が雑でつなぎ目が消されていない。脚部はラッパ状に開くが、途中で屈曲し、さらに開いて端部へ達する。端部は肥厚され、ヘラケズリした後ナデ調整され、先端を外側へ引き出している。脚部内外面ともに丁寧にナデ調整されているが、内面にはノタ目が残されている。胎土は、砂粒子を含み緻密でまた、最大径1mmまでの白色粒子を多量に含む。焼成は良好だが、脚部裾に歪みがあり、色調は暗灰色を呈する。

8. 有蓋高坏

口径12.4cm×器高11.1cm×最大径14.3cm×脚部径9.9cm

坏部の器形を丸くつくる。口縁部は、やや内傾し強くナデ調整されている。蓋受け部との接合部は工具で押さえた痕跡を残し、端部は玉縁化している。坏部体部外面は右回転ヘラケズリされ、体部中央はその後にナデ調整されているが、強いノタ目が残されている。坏部内面は丁寧なナデ調整が施されているが弱いノタ目が残っている。

脚部はラッパ状に開き、裾付近で薄く仕上げ、若干屈曲してさらに開いている。脚端部はやや肥厚させ、断面を略三角形につくる。脚部外面は右回転ヘラケズリ後ナデ調整をし、ノタ目を消している。内面はナデ調整されているが、強いノタ目が残されている。胎土は、砂質を多く含み、最大径1mmまでの白色粒子を若干含む。焼成は良好であるが、やや歪みが見られ、有機物による焼成時の焼きぶくれが見られる。色調は暗灰色を呈する。

9. 有蓋高坏

口径11.6cm×器高10.8cm×最大径13.9cm×脚部径8.7cm

坏部は丸くつくられ、口縁部は丁寧なナデ調整がされ、やや強く内傾し、口唇部を若干厚くしている。蓋受け部は工具による押さえがみられ端部は玉縁化している。坏部外面は丁寧な右回転ナデ調整され、ノタ目を消している。内面も丁寧にナデられているが、底部にはノタ目を残している。脚部はラッパ状に開き裾部で平坦をつくり、さらに開く。やや内湾して端部へ達するがナデ調整で端部の1部を外側へ引き出している。脚部外面の坏部との接合部は右回転ヘラケズリされており、そこ以外はナデ調整されている。ナデ調整の部分は、平坦な所まで強いノタ目が残されているが、裾周辺は丁寧にナデられている。脚部内面は、ナデ調整されているが強いノタ目が残っている。胎土は砂粒子で緻密である。焼成は良好で、色調はやや暗い青灰色である。

10. 有蓋高坏

口径12.4cm×器高11.2cm×最大径14.2cm×脚部径9.9cm

坏部の器形は体部を直線的につくり、脚部との接合部は平坦にしている。口縁部は内傾させ、端部を肥厚させて若干屈曲している。蓋受け部には工具による押さえがみられ、端部を玉縁化している。坏部外面は、脚接合部及び蓋受け部下が右回転ヘラケズリされ、体部はナデ調整がされている。この体部のみに弱いノタ目が残っている。

坏部内面はナデ調整されているが、底面にはノタ目が残されている。脚部はラッパ状に開き、端部をやや肥厚させている。内外面ともナデ調整されているが、右回転ロクロによるノタ目が残されている。胎土は、砂質で白色粒子を多量に含まれる。焼成はやや良好であるが、焼成時の有機物による焼きぶくれが多くみられる。色調は坏部内面は灰色、外面は白灰色、脚部内面は青灰色、外面は暗灰色を呈する。

11. 坏蓋

口径9.0cm×器高3.5cm

頂部を平坦につくり、頂部と体部の境に段をもつ。口縁部は、ほぼ垂下して体部との境に1条の沈線を施す。また、頂部の器厚は厚く、平坦部には右回転ヘラケズリされ段差の斜面部分には、手持ちヘラケズリされている。さらに、頂部には「×」のヘラ記号が刻みこまれている。内面はナデ調整され、弱いノタ目が残っている。胎土は砂粒子を含み、焼成はやや不良である。色調は灰色を呈する。

12. 坏身

口径7.7cm×器高3.6cm×最大径9.2cm

器厚は全体的に厚く、口縁部を薄くつくる。直立する口縁部と断面三角形の蓋受け部を有し、底部は平底を意識している。底部は右回転ヘラケズリされているが、体部との境は手持ちヘラケズリが施されている。また、底部には「×」のヘラ記号が刻みこまれている。内面はナデ調整され、弱いノタ目が底部に残る。胎土は白色粒子の砂粒子を含み、焼成は良で、色調は明るい灰色を呈する。

13. 長頸壺

口径8.5cm×器高14.7cm×最大径11.3cm

口縁先端部の外側をつまみ出し、頸部は外反しながら立ち上がる、長頸の小型壺である。胴部は球状で底部は丸底である。口縁上端部はナデ調整され、1条の沈線と突帯状の稜で頸部と区画し、ここから口縁部は屈曲して立ち上がる。頸部は、下半に2条の沈線を巡らせ、その後ナデ、その上部に波状文帯を持つ。肩部にはクシの刺突を施し、その下を2条の沈線で区画した後、ナデ調整している。さらにその下方に、クシの刺突を施し、下に2条の沈線を巡らせている。胴部以下は左回転ヘラケズリされており、弱いノタ目が残る。胴部と頸部の接合部分の内面は静止状態で工具による縦方向にナデつけた接合の押さえをみる。胴部内面はナデ調整されているが、底部には内当て痕が残り、それを工具で消している。胎土は、白色粒子を多く含む砂粒子で緻密である。焼成は良好で、色調は明るい灰色を呈し、頸部から肩部にかけ若干の自然釉が掛かっている。

14. 堤瓶

口径8.0cm×器高19.2cm×最大径13.9cm

頸部から口縁部にかけてラッパ状に開き、口縁端部は断面三角形を呈する。頸部との境には、1条の沈線と突帯状の稜で区画している。頸部上方には、ヘラ状の工具による波状の文様が施文され、胴部との接合部付近にさらに2条の沈線を巡らせ、文様を区画している。胴部平面は右回転ヘラケズリされている。また、胴部側縁面に2条の沈線を巡らせている。胎土は砂粒子を多く含む緻密で、焼成はやや不良、色調は暗灰色を呈する。また、一部に自然釉が掛かっている。さらにやや軟質のため背表面が剥落している。

15. 甗

口径9.4cm×器高13.4cm×最大径10.2cm

口縁部は頸部からラッパ状に開く。口縁部と頸部の境に小さな稜を有し、頸部上方に浅い2条の沈線を巡らす。外面は、さらに右回転のクシ目調整している。口唇部は丁寧にナデ調整されている。内面も丁寧にナデられ、胴部との接合部はナデ調整が強く残る。体部の器形は球状を呈し、底部は厚く仕上げる。胴部上方に上向きに穿孔を有し、外面にやや突き出している。肩部と体部の境に2条の沈線を施し、頸部と同様のカキ目調整が体部までなされる。底部は、右回転ヘラケズリされた後丁寧にナデ調整している。胎土は最大径1mmまでの白色粒子を含むやや粗い砂質で、焼成はやや不良、色調は白灰色を呈する。

16. 長脚付広口埴

口径4.8cm×器高17.3cm×胴部最大径9.8cm×脚部径10.9cm

直立した口縁部を丁寧にナデ調整して薄く仕上げ、大きく膨らんだ肩部の上下に、巾広の不明瞭な沈線で区画された部分に、ヘラ状工具によるキザミを施す。胴部下半から底部にかけて丸く仕上げ、左回転ヘラケズリされ、器厚も厚い。埴部内面はナデ調整され、底部はノタ目が残されており、その中央はナデ調整の痕跡を残す。長脚部はラッパ状に開き、端部を肥厚させ断面三角形にしている。三方向に2段の透かしを入れ、上下の透かしの間に2条の沈線を巡らせている。胎土は最大径2mmの白色粒子を含む砂粒子で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。

●鉄製品について（第9図）

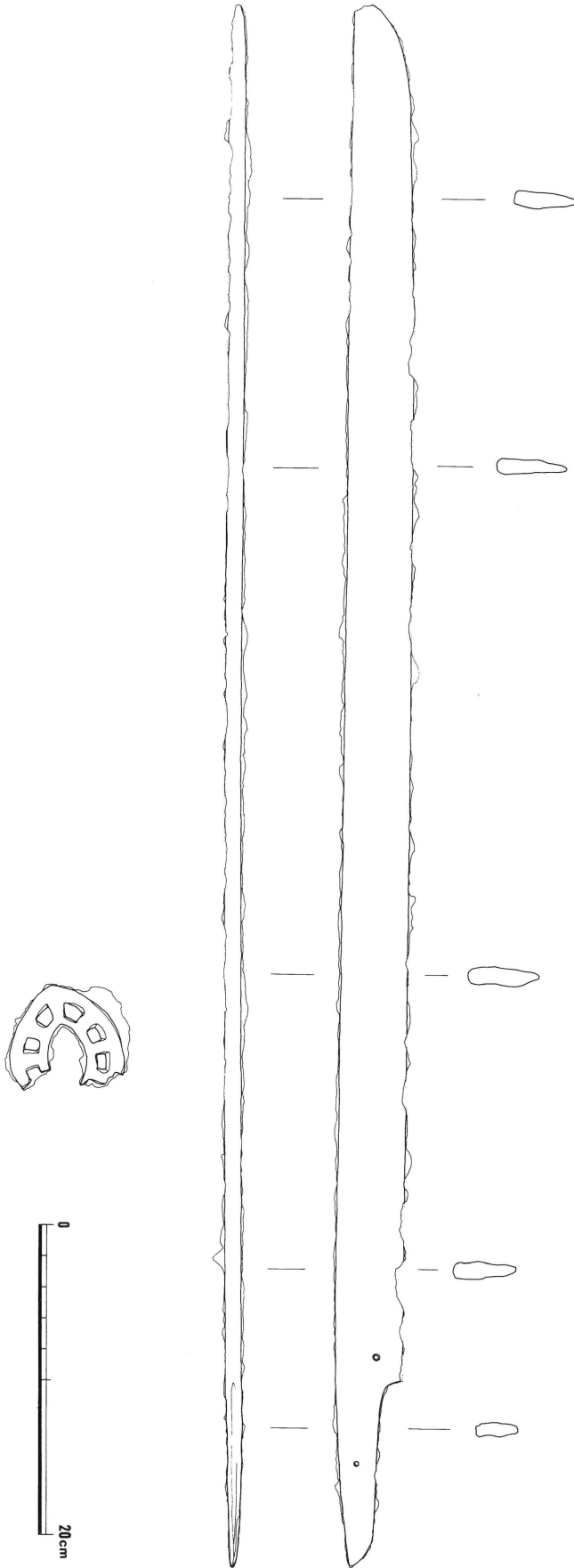
1. 直刀

全長100.5cm、関幅4.3cm、茎幅3.0cmを測る。平棟平造りの直刀である。また、径0.3mmの目釘穴が関から5.3cmのところがありさらに、刀身部に関から1.5cmのところ径0.5mmの円孔があり、これは装飾的な飾りをつけるための孔と思われ、飾り大刀の様相を呈する。錆に覆われていたが、比較的保存状態が良く、しっかりしている。

2. 鐔

鐔は、倒卵型の有窓鐔で3/4程が残存している。8窓を想定でき復元径で長径8.5cm、短径7.2cmを測る。

尚、直刀・鐔の保存処理は、奈良県（財）元興寺文化財研究所に依頼したが、象嵌などは見られないということであった。



第9図 第2号横穴出土遺物実測図(2)

第6章 ま と め

下土方青谷横穴群発掘調査は、県営農地開発事業に伴うもので、平成2年度に調査された。本横穴群は、西向き斜面に開口する2基で1群を構成する小さな横穴群であり、また横穴群が集中する地域からも離れている。横穴群は、比較的南向き或いは東向き斜面に存在するケースが多いという考えがあり、事前の確認調査では主に南及び東向き斜面を中心に踏査していた。こうした状況の中で、全く存在の知られていなかった横穴群が発見されたことは、幸運であったと思われる。今回の発掘調査において得られた成果を次にまとめておくことにする。

1. 第1号横穴は、6世紀後半から末頃に築造され追葬はなかったと思われる。さらに、出土遺物の中の山茶碗やかわらけなどから13世紀頃に再利用されていると考えられる。また、築造当初は、組合せ式箱式木棺による埋葬が行われた可能性がある。

しかし、玉類などが出土していなく、他の遺物の出土状況からかなり早い時期に盗掘を受けていると考えられる。

2. 第2号横穴は、発見当初から封鎖石もきれいに残存しており、羨道部天井が落盤しただけで盗掘はないと思われた。また、玄室内には多量の水が溜まっており、排水施設が不備と考えた。

本横穴は出土土器から第1号横穴よりやや古い6世紀後半に築造されたと考えられる。

この築造時に小礫による棺床と人頭大円礫による礫床が施されており、壁面に沿って礫床がないことから、周溝状の排水施設が完備されていた可能性が高い。また、礫床の上に貼り床が施されていた可能性も否定できない。その後、7世紀中葉頃に追葬があり、埋葬されていた人骨を奥壁側へ片付け、須恵器も玄室右側開口部付近に片付けて、坏蓋を副葬したと思われる。また、玉類等の出土は全くなく、封鎖石も多少崩れていることなどからその後に盗掘されていると思われる。尚、直刀については、初葬時に副葬され追葬時に片付け忘れたか或いは追葬時に副葬され、盗掘時に持ち出されなかったかについて不明確である。

最後になってしまったが、本横穴群の発掘調査にあたり、多くの方々の御指導・御協力を
受け、さらには、本報告書作成についても特に清水市教育委員会渡辺康弘氏、島田市教育委
員会澁谷昌彦氏には、格別の御指導を受け、その他多くの諸氏の皆様のおかげで刊行するこ
とができた。文末であるがここに記して感謝の意を表したい。

〈参考文献〉

- 川江秀孝・杉山影梧「小笠郡大須賀町愛宕横穴群の調査」『静岡県埋蔵文化財調査報告』1975年
- 静岡県教育委員会『遠江の横穴群』1983年
- 静岡県教育委員会『静岡県の窯業遺跡』1989年
- 島田市教育委員会『東山古墳群北支群』1988年
- 島田市教育委員会『白岩寺古墳群』1991年
- 袋井市教育委員会『大門大塚古墳』－昭和61年度基礎資料収集調査報告書－1987年
- 袋井市教育委員会『衛門坂古窯跡』1989年
- 伊豆長岡町教育委員会『大北横穴群』1981年
- 函南町教育委員会『史跡柏谷横穴群保存修理事業報告書』1991年
- 菊川町教育委員会『大淵ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦横穴群』1983年
- 菊川町教育委員会『山田横穴D群2号遺跡発掘調査報告書』1988年
- 菊川町教育委員会『山田横穴群E群1号発掘調査報告書』1990年
- 森町教育委員会『菖蒲ヶ谷古墳群（8号墳）発掘調査報告書』1992年
- 大東町教育委員会『岩滑清水ヶ谷横穴群・岩滑松ヶ谷横穴発掘調査報告書』1988年

版 图

図版 1

1. 第1号横穴 調査前現況
2. 第2号横穴 確認状況
3. 下土方青谷横穴群 調査前全景（西から望む）
4. 下土方青谷横穴群 封鎖石検出状況

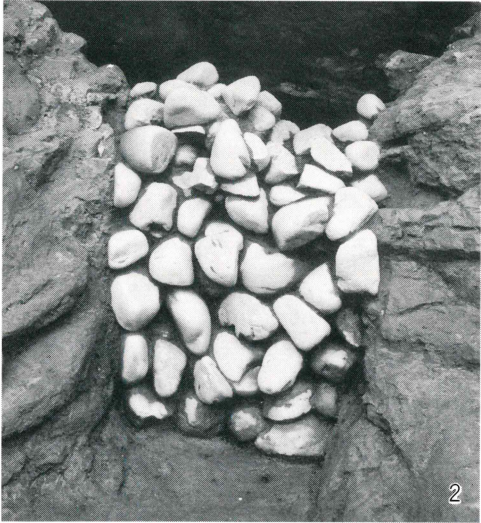


図版 2

1. 第 1 号横穴 封鎖石検出状況
2. 第 1 号横穴 封鎖石検出状況 (正面)
3. 第 1 号横穴 開口部周辺完掘状況



1



2



3

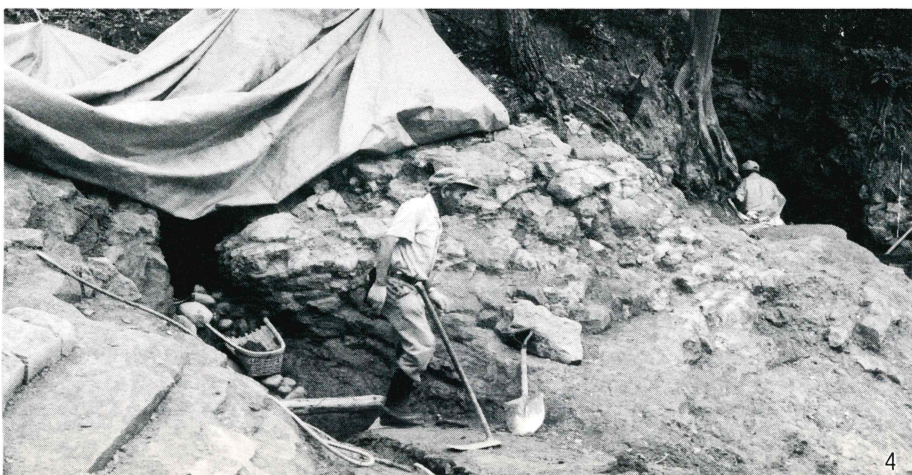
図版 3

1. 第1号横穴 事前調査時確認状態
2. 第1号横穴 玄室内遺物出土状態
3. 第1号横穴 玄室内完掘状態
4. 第1号横穴 完掘状態
5. 第1号横穴 墓前域完掘状態



図版 4

1. 第1号横穴 発掘作業風景
2. 第1号横穴周辺 発掘作業風景
3. 第1・2号横穴 発掘作業風景
4. 第1・2号横穴 発掘作業風景



図版 5

1. 下土方青谷横穴群 完掘状態全景（西から望む）
2. 第2号横穴 封鎖石検出状況（正面）



图版 6

1. 第2号横穴 直刀出土状态
2. 第2号横穴 须惠器出土状态
3. 第2号横穴 礫床検出状态
4. 第2号横穴 棺床検出状态



1



2



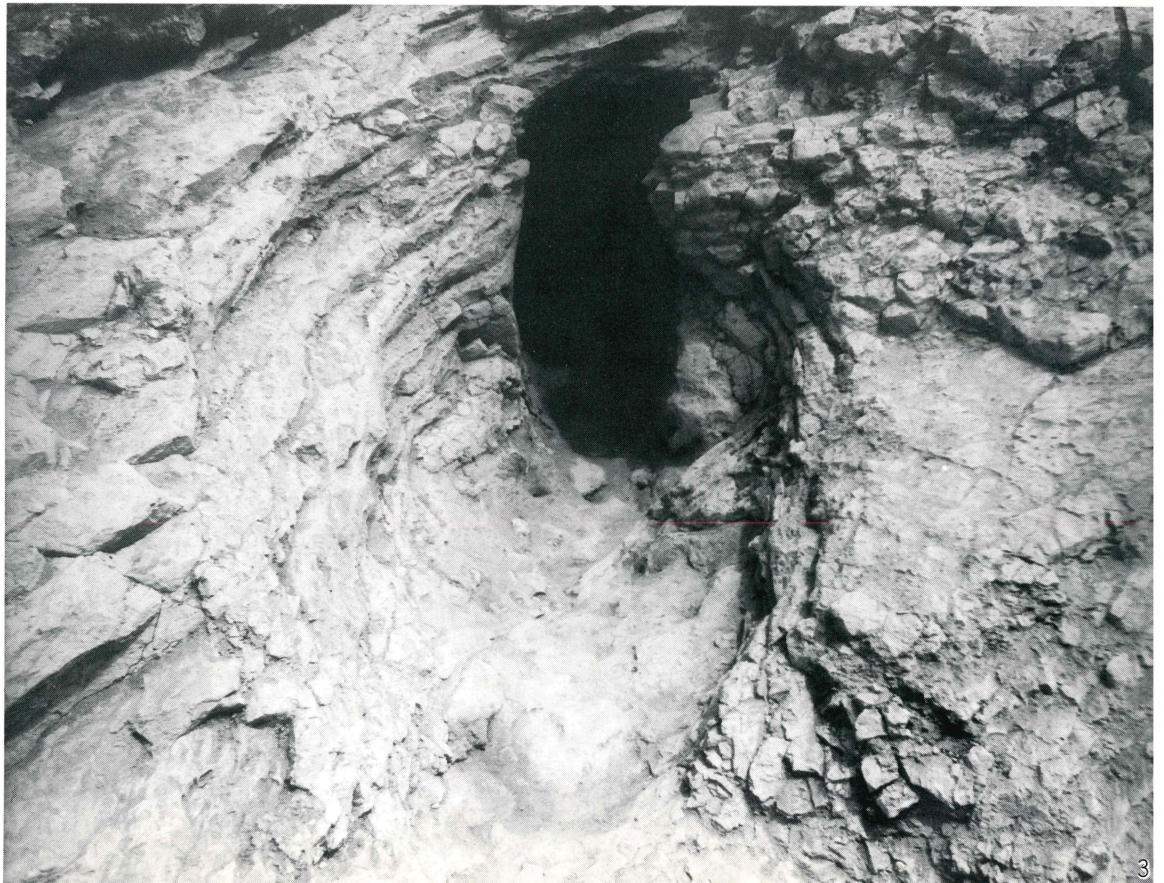
3



4

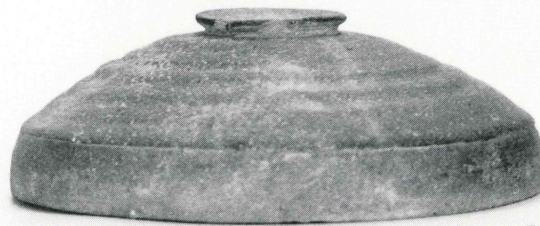
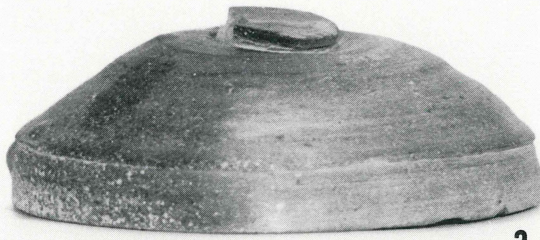
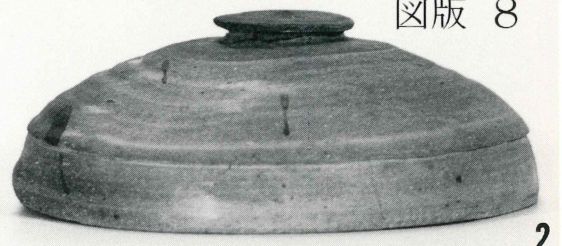
図版 7

1. 第2号横穴 玄室内側壁付近ノミ痕状態
2. 第2号横穴 玄室内完掘状態
3. 第2号横穴 開口部周辺完掘状態



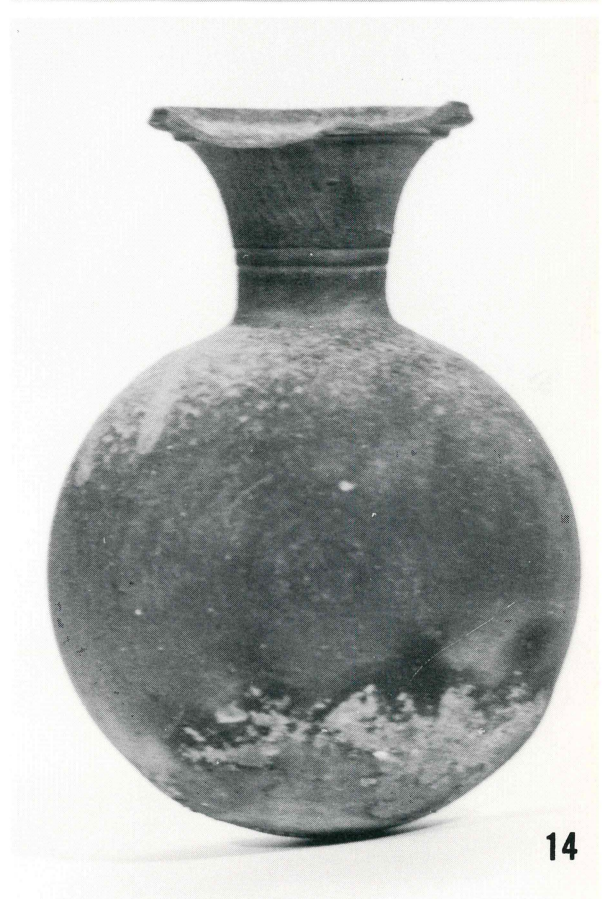
图版 8

- 1~5. 第2号横穴出土须惠器 有盖高坏盖
6~10. 第2号横穴出土须惠器 有盖高坏



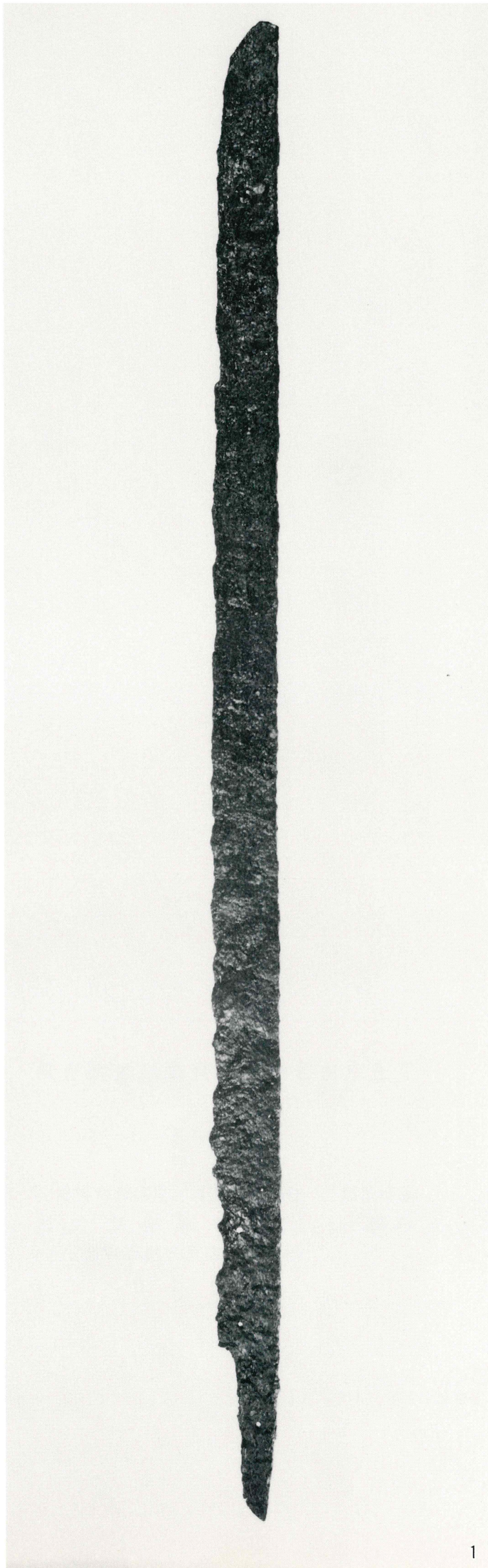
図版 9

1. 第2号横穴出土須恵器 坏蓋
2. 第2号横穴出土須恵器 坏身
3. 第2号横穴出土須恵器 蓋坏の合わせた状態
4. 第2号横穴出土須恵器 長頸壺
5. 第2号横穴出土須恵器 提瓶
6. 第2号横穴出土須恵器 甗
7. 第2号横穴出土須恵器 長脚付広口埴

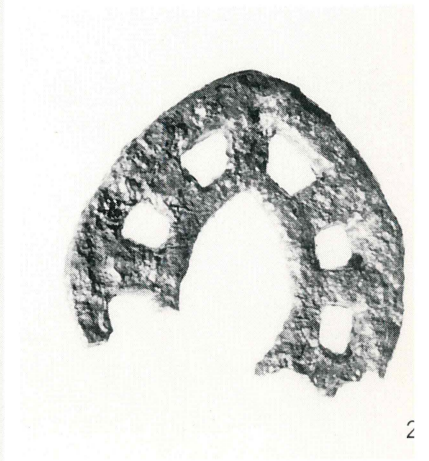


図版10

1. 第2号横穴出土鉄製品 直刀
2. 第2号横穴出土鉄製品 鱈



1



2

下土方青谷横穴群発掘調査報告書

平成5年3月

編集発行 静岡県小笠郡大東町教育委員会
印刷所 松本印刷株式会社
静岡県榛原郡吉田町片岡2210

